

なかったんです。大切だったのは、一番良かったのは、一杯の中国茶を通じて多くの国の人と出会えた事、一晚中話をしたことは、今でも忘れることのできない財産です。

去年の国慶節に本格的な茶器を買いました。それから徐々に茶器を買い足していき、帰国前には、とても多くの茶器と茶葉がそろいました。その茶器や茶葉に全ての思い出が詰まっています。

一杯のお茶は、ささくれ立った私の心を癒してくれましたし、多くの人とも知り合えました。まだまだ未熟ですが、これらの経験や出会いを通じて、留学当初より中国語も上達しました。

とにかく中国茶ですね。お茶抜きでは今回の留学は有り得ませんでした。

鄭：カルチャーショックは？

原田：留学当初から何も感じませんでした。初日に何とか大学について、食堂で食べた晩ご飯の味は今でも忘れられません。大げさな話ですが、一口ご飯を食べた時に、あの激動の到着時のことが頭をよぎり、その時初めて「この国で生きていける」と、思いました。食に関しては何も問題なかったです。なにしろ初めての中国、初めての外国ですから、周りが知らない事だらけ。慣れる事に必死で、カルチャーショックを感じている暇はありませんでしたよ。

鄭：今後どのように中国での経験を活かしますか。又、中国語と法律を結びつけていく予定は？

原田：今は、法律と中国語を結びつけるというビジョンは、明確に浮かんでません。最近は司法通訳というのがありますよね。まあ、それも一つの選択肢だと思います。でも、私には夢があるんです。機会があれば今一度中国に留学し、本格的に中国茶の勉強がしたいです。そして、小さくてもよいから、中国茶のお店を開きたいですね。留学にあたって、家族、愛大の先生方、国際交流課のお世話をしてくれた方々、留学先の先生方、友人と、助けてもらってばかり、与えてもらってばかりでした。今度は、勉強させていただいた中国語、

現地での経験を活かし、お茶という形で少しでもいいから皆様にお返しをしたいと思います。

鄭：最後に一言お願いします。

原田：まず、私の留学を支えていただいた、家族、先生方、大学職員の皆様、友人に深く御礼申し上げます。

愛大は中国で、特に天津では有名で、高い評価を受けています。これも、我々の先生、先輩方の努力により培われた伝統だと思います。留学している時は、我々の一挙手一投足が大学の評価につながります。現地では、愛大生という誇りと責任を感じて勉強をしてほしいと思います。本日は有り難うございました。

・・・現在、原田君とわたしとの会話は全部中国語で行っています。わずか1年間だけの留学でしたが、その中国語の流暢さに感心する限りです。

世界で一番好きな歌手

経営学部

山本 大造

みなさんにとって、「世界で一番好きな歌手」は誰でしょうか。しかも、その人の楽曲や声を聞くだけで、ふるえ立つような感動を覚えたり、しみじみ感慨にふけったり、心に残る風景を思い起こしたり、鳥肌の立つような勇気に満ちた気分になったり、人との出会いや思い出を振り返り、素直な自分を取り戻したりできるような。そんな歌

手に出会うことができれば、それ自体が幸せなことだと思います。私の場合、韓国の女性歌手、李仙姫（イ・ソンヒ）がそんな「世界で一番好きな歌手」なのです。

李仙姫は、ご存じの方もいらっしゃるでしょうが、背が低くて身体も小さく、メガネをかけていて、どちらかといえば地味な印象で見られがちです。しかし、その小さな身体のどこから出なのかというくらい圧倒的な声量と幅広い音域までカバーする歌唱法は、見た目とはまったく違う印象を与えます。1982年にデビューして以来、ポップス調のものからバラード調のもの、民族音楽風のものから、男性声楽家とのセッションや激しい曲調のものまで多種多様な楽曲を歌い継ぎ、韓国を代表する女性歌手の一人として老若男女問わず多くの人たちに支持されています。その間、心臓病の持病を抱え、いくつものつらい思いをし、ソウル市議会議員として多忙な日々を送った彼女ですが、今日でも声量衰えることなく、現役で活動中です。

そもそも私が李仙姫を知ったのは、私の初めての韓国旅行（91年8月）で彼女のカセットテープを何気なく買って帰ったことがきっかけでした。当時の私は、一人で海外をぶらつくことにあこがれ、「手近だから」という理由だけで韓国を選び、これまた身近にいた韓国人留学生の友人から韓国語の手ほどきを受けていました。実に何気ないきっかけから、韓国を知ろうと思ったのです。しかしこれも縁というものでしょうか、私はどんどん韓国の魅力に引き寄せられ、ついに韓国一人旅を決行したのでした。

ソウルから昭陽湖（ソヤンホ）を通る「裏ルート」で束草（ソクチョ）に行き農家の一室に泊ってもらって初秋間近い雪嶽山（ソラクサン）に登ったり、紅島（ホンド）に渡ろうとして木浦（モッポ）を訪ねたり、光州（クワンジュ）や釜山（プサン）なども巡る気ままな旅でした。その旅の途中、ソウルのCDショップで、店員から勧められるまま女性歌手のカセットテープをいくつか買った中に李仙姫のライブ版テープが含まれていた

わけです。

もともと韓国語の語感には私にとって心地よいものでしたから、当初は「耳障りが良いな」くらいに思っていました。しかし、日本のテレビ番組で李仙姫を見て「これはすばらしい」と確信に変わりました。確か1991年末だったと思いますが、NHK番組「ゆく年くる年」に李仙姫がソウルからのライブ放送で出演し、彼女の代表曲「Jに（ジェイエゲ）」と「美しい山河（アルンダウンガンサン）」を披露してくれました。私は感動のあまりテレビの前で呆然と立ちつくし、年が変わるのも忘れて聞き惚れてしまいました。

その時以来、私にとっての「世界一の歌手」は李仙姫になりました。自ら韓国に行ったり、誰かが韓国に戻るたびに音源を集め、ますますのめり込んでいきました。そればかりではありません。彼女は私に大切な人の縁も運んでくれました。

それは92年春、私が横浜で大学院生活を送りはじめたころのことです。昼休みに院生室で李仙姫のテープを聴きながら一人昼食をとっていた時、彼女の声を通りがけに耳にした一人の韓国人留学生が「韓国人かい？（ハンゲンサランエヨ?）」と声をかけてきました。実は彼も李仙姫のファンで、その後意気投合し、彼を中心に私は韓国人留学生達と親交を広めていきました。当時、私は日々の食費にも困る生活をしていたため、時折彼らは自宅に招いてくれ、韓国料理を振る舞ってくれました。韓国人留学生達の温かい人柄に励まされ、栄養をつけてもらって、きびしい時期でしたがなんとか今日の私につながる事ができたわけです。声をかけてくれた韓国人留学生、張武鉉（チャン・ムヒョン）氏は、今ではソウルで事業を興しCEOとして活躍していますが、今でも時にふれて親交を温め、私にとってかけがえのない「ソウルの親友」になっています。李仙姫を聞くたびに、当時のことや仲間達が思い起こされ、懐かしく熱い気持ちがよくみがえってきます。

そしてこの夏（2004年8月）、ついに彼女のコンサートを生で見える機会を得ることができました。ちょうどソウルを訪れる日、李仙姫の20周年コ

ンサートが世宗文化会館で行われることを知った親友の張 武鉉氏が、私のためにチケットを手配してくれて、私は初めて彼女をこの目で見、彼女の声をこの耳で聞いたのです。

それはそれは、すばらしい体験でした。コンサートホールに入る前から、私は長年離ればなれになっていた恋人に再会するようなときめきと興奮を覚え、気分は高まる一方でした。ロビーでコンサートの運営を手伝っていた「ソニーファン (李 仙姫ファンの意)」の女性から、李 仙姫の直筆サイン入りCDを譲ってもらい、新しいBEST版CDを買い求め、ますます気分は高揚していきます。そしてステージに登場した李 仙姫を見た時には、思わず隣にいた張 武鉉氏の肩をたたいて喜びを露わにしました。そのコンサートの約2時間は、もう決して忘れることができません。今思い返しても、その感動がありありとよみがえってきます。

確かにコンサートで披露された楽曲は、すべて繰り返し聞き込んだ私の耳になじんだ曲ばかりでした。しかし、生で見、生で聞く彼女の歌声は、私の五感のすべてに入り込み純粋な感動を与えてくれました。プログラムも後半になると、周りの観客達と一緒に立ち上がり、ともに楽曲を口ずさみ、それはまるで熱いライブの様でした。彼女の代表曲でもあり、コンサートの最後の曲「美しい山河」では、民族や国、性別や年齢の差を超えて会場がまさに一つになる大合唱の渦でした。彼女のデビュー曲でありアンコール曲でもある「Jに」では、彼女自身マイクを会場に向けてくれ、私たち観客もそれに応え、想いの結晶を作り上げた気持ちになりました。まさに、私の好きな韓国の人々と私が一つになった得難い一時でした。ちなみにコンサートのあと、ホップ (ピアホール) で飲んだビールの味が格別だったことは言うまでもありません。次の機会には、大学路 (テハンノ) にある李 仙姫のライブハウス「LIVE小劇場」を訪ねてみたいと思っています。

私の場合、心を揺さぶられるまでの感動を与えてくれる歌手は、韓国の女性歌手だったのですが、なにもみなさんにも海外にそれを求めよと言

うつもりはありません。国内にもきっとみなさんの「世界一」があるでしょう。ただ、広く世界を見聞きすることで、得られる高みは必ずあると思います。機会があれば、みなさんの「世界一」をうかがってみたいところです。

悲しみは夏雲の下に サイパン島訪問記

法学部
河原誠三郎

爆撃機はいつも南からやってきた。翼は朝日で銀色に輝き、ぼくらに向かってきた。その度ごとに、ぼくらは家を捨て、裏山へ逃げた。

ぼくはいまその南に、南の島、サイパンにきている。あのB29爆撃機が、日本本土空襲へ発進を繰り返したその場所だ。

名古屋空港で飛行機に乗り込んだ時、その離陸待機中のエンジン音にぼくは恐怖を覚えた。そうだ、この音だった。一万メートルの高空から落ちてくる、切れ目のない、周波数の異常に高い音だった。ぼくはすぐにも乗務員に機種を確かめたかった。人生の初めに聞いたあの大型長距離爆撃機を製造した同じ会社の757機だった。

いつかはここへ来たいと思っていた。憧れの島ではない、遊びのための島でもない。ぼくらの若い父達が、空しく戦い、玉砕という勇ましい用語で美化されてはいるが、その実、見捨てられて死んでいった小さな島だ。ぼくは、短い旅の一昨日、ここに着いた。

ぼくらのホテルは島の西、珊瑚礁に沿った海岸